平成 23 年度　大学職員情報化研究講習会　～基礎講習コース～　レポート

「充実した 4 年間を目指して」

初年次学生支援センター
（F2 グループ）

【Ⅰ．概要課題認識】

現在、多くの大学で休退学者数の増加という問題を抱えている。その原因として考えられるのが「入学直後のつまずき」である。私たちは、「入学直後のつまずき」によって発生する休退学者を減らすことをテーマに設定した。そして、学生生活を入学当初からサポートする体制を構築することによる問題解決の方策を検討した。

【Ⅱ．背景提案】

1.　大学を取り巻く環境の変化

現在、大学は以下のような環境に置かれている。

・18 歳人口の減少
・大学のユニバーサル化
・入試形態の多様化
・学生の多様化

結果、大学に目的意識を持たず、どこでもいいので受かった大学に入学する「なんとなく入学」をする学生が増加している。

2.　「なんとなく入学」の大学生が抱える問題

・卒業までの間に行うべきことが見えず、勉強に対するモチベーションが低い。
・目的意識を共有できる仲間がいないため、友人作りに苦しむ。
・大学に入学すること自体が目的となっている。
・大学生活がうまくいかず、ひきこもりのような状況になってしまう。

これらの中でも、特に以下の 3 点に焦点を絞った。

① 目的意識がない
② 人間関係に悩みを抱える（友人ができない）
③ 基礎知識、基礎学力がない

これらを基に、大学に求められること、大学が支援できることを提案する。それが"初年次に行う学習支援・学生サポート"である。

【Ⅲ．解決策】

1.　"初年次に行う学習支援・学生サポート"の充実

現在、各大学で以下の取り組みが行われている。

① 目的意識がない学生に対して
目標設定シートを作成させ、学生生活の具体的な道筋を立てさせる。その中で目標設定を行わせる。

② 人間関係に悩みを抱える学生（友人ができない等）に対して
友人作りの場を大学が準備して、きっかけの基点となる。例えば、新入生合宿や大学が運営するポータルサイト等。

③ 基礎知識、基礎学力がない学生に対して
学習支援室を設置して、学習面のサポートを行う。入学時の学力テストの実施により、各学生の弱点を早期に明確化する。補習を行い授業に支障をきたさな

いよう支援を行う。

これら 3 つは、教職員が一丸となった、教職協働によるものである。

しかし、私たちのグループは教職協働で行うサポートのみでは、不十分であると考えた。なぜなら大学組織は、教員と職員、そして学生により構成されているからである。学生にも"初年次に行う学習支援・学生サポート"に参加してもらう必要性があると考えた。

そこで私たちは、先に挙げた教職協働で行う 3 つの解決法に加え、先輩学生によるメンター制度を行うという教職学協働の体制をとることを提案する。これが"初年次に行う学習支援・学生サポート"のもっとも重要なポイントとなる。

2. 先輩学生による新入生対象メンター制度の実施

先輩学生による新入生対象メンター制度とは、3 年生が新入生に対して面談を行うものである。ICT を利用して、学内で共有された学生情報を基に、教職員により「同学部」「同性別」「同じ境遇（例えば、同じ職種への就職を希望している。同じ資格取得を目指している。等）」をマッチングし、面談を行う。入学後間もなく面談を行い、徐々に面談の回数を減らしていく。

提案するメンター制度のメリットは、以下の点を挙げることができる。

・学生が抱える問題の早期発見につながる。
・相談相手が先輩なので、教職員よりも話しやすい。
・面談を機に、学生同士の交流が増える。
・学生の目線から話が聞けるので、教職員だけでは見えない部分へのアプローチが可能になる。

メンター制度導入により、見込める副次的効果は以下のものが考えられる。

・学生同士の交流が盛んになり、大学自体の活性化につながる。
・面談を 3 年生が行うことによって、面談を担当した学生自身の成長につながる。

留意すべき点として、学生の個人情報取り扱いという点が考えられる。①入学時に、学生にメンター制度用情報開示書（情報開示同意書）を記入してもらう。②「メンター制度以外の目的に使用しないという誓約」「メンター制度に必要最低限の情報のみの記入と開示」「3 年生にメンター制度で知り得た情報を他言しない誓約書の提出」等の誓約を取り交わす等をして、個人情報の取り扱いにも留意した体制をとる。

【Ⅳ．まとめ】

高等教育のユニバーサル化が進行することで、大学は様々な問題に直面している。とりわけ、初年次学生の「つまずき」は、教員や職員個々の力ではなく、大学が組織的に対応して取り組まないと解決できない問題である。

初年次学生に対する学習支援、学生サポートの充実を実行することで、学生がスムーズに大学生活に移行することができ、不適応があっても早期に対応することが出来る。大学生活にソフトランディングすることにより、学生の 4 年間の生活が実りあるものになり、ひいては、各大学が人材養成目的を果たすことにもつながると考えられる。